モントブティック　グッドエンディング『凱旋の女王』

ムーランドロンシャンで勝利した瞬間に天啓を賜った、あの才能溢れるモントブティックは凱旋門賞も夢ではないと。そしてその結果は見事に実ったのだ、モンジュー、エルコンドルパサーを抑えて堂々たる勝利。真っ赤な長髪を棚引かせながらゴールを通過した際は感極まって膝から崩れ落ちて泣いた程だった。

「トレーナーさんったらもー、いい年して泣いちゃってるの？そんなに嬉しかった？」

【あぁ、こんなに感極まったのは始めてだよ】

思えば女房とは別れ実の娘も亡くし失意のどん底にいた際、あの瓜二つと勘違いした程元気で明るいウマ娘を目にした途端に運命的なものを感じずにはいられなかった。
そして今ではブティック無しの生活を考えられない程に、彼女の事を意識してしまっている自分がいた。……もうこれ以上の機会が熟した事はないだろう。

【なぁ、ホテルの部屋で先に待っててくれないか？】

「え？何々？もしかして告白ってやつ！？やだもー♥しょうがないなぁじゃ先にシャワー浴びて待ってあげる♥」

トレーナーからの好意と受け取った彼女はルンルン気分でホテルへと向かった。後は野となれ山となれだ……

~ ⏰ ~

「わぁ、トレーナースーツでキメッキメだね！も～私ドキドキしちゃう♥」

彼女は浮かれた顔で告白待ちしてるが自分が今から行うのは告白ではあるが恋人が行うような告白ではない、例え引かれようと最後まで自分自身に起きた過去を言うつもりだ。

【ブティック、実はな……】

そして私はブティックに全てを話した。結婚もして妻も娘もいた事、その両方とも死別した事も。話を聞くにつれてあんなに楽しそうな顔がみるみる耳を絞り悲しそうな顔をさせたのは誠に申し訳ない事をしてしまった。
でもそれはブティックに完全なる親愛の対象として話をしたかった事を打ち明けると彼女は私をそっと優しく抱きしめてくれた。

涙目で此方に抱きしめにきた際には思わず自分も涙を浮かべてしまった。そしてブティックに改めて指輪を送った、勿論okしてくれた。
そんな時まるで祝福するように彼女の実家にお邪魔した時に流れてた讃えるような歌が聞こえてくるような気がした。

「もしもし？当主様？うん、ブティックのトレーナーの件だけどさ。なるはやで結婚式の式場の手配頼みたいんだけど。主催名義は私の名前でいいよ、妹の幸せの門出を祝うのは私の役目だろうしさ。」
オワリ